一　次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

「古池や蛙飛びこむ水の音」という芭蕉の有名な俳句がある。いうまでもなくこの俳句の主役は音である。だが、その音も「ボチャン」とか「ポチャン」ではつまらない。それは丁度、水に飛び込んでいる蛙の絵や、そのまわりに丸く画かれた波紋を連想するくらい馬鹿気ている。僕等の感性は［1］に汚されているもので、そういう汚れた感性でこの句を受けとったら、むしろ滑稽になってしまう。

いうなら、古池や蛙の姿など見なくともいいのである。ただ耳だけの世界がそこにある。蛙の飛び込んだ水の音、つかの間の余韻、そのかすかなきとり難いものを追って耳は限りない静寂に出会っていく。〔ア〕「古池」という言葉は、この［2］のために絶対欠かすことが出来なかったというふうにみえる。

そういう芭蕉の耳はまた、「閑さや岩にしみ入る蝉の声」という俳句を生んだ。蝉の声を「しみいる」ときいた耳は①並大抵ではないが、もちろん蝉は油蝉か桜蝉〈＝ニイニイ蝉〉であろう。〔イ〕夏の山の中などできくその声は、とても「閑さ」などといえたものではない。〔ウ〕けれどもそうして激しく耳を打っているうちに、やがて耳鳴りのように無感覚になって、いつの間にか深い静寂にとり囲まれていく。だがその静寂を意識すれば直ちに蝉の声が耳にもどってくるといった、［3］を去来する遠近の感情を僕らがよく知っているから、「岩にしみ入る」という句に圧倒されるのではあるまいか。〔エ〕凡庸な耳では到底きとることの出来ぬ変化を、眼前の岩にしみいる響きときわけたというふうである。

これらの俳句から、僕等は芭蕉の音に対する感性を窺い知ることができる。そしてまたその感性は、芭蕉の俳句を愛している僕等に通じ、芭蕉以前の古い日本の耳に通じているに相違ない。それを一つの音に没入することの出来る耳、あるいは閑寂の緊張を知る耳といってもいいだろう。それは近代音楽を生み出したヨーロッパの耳とも、好んで打楽器の刺戟的な響きを打ち鳴らすたぐいの東洋の耳とも異った、②ある独自の感性を明かしている。

このことは梵鐘一つを見てもわかる通りで、日本のように山に囲まれた土地の多い国では鐘の響きが霧のようにあたりに立ち込め、うずを巻きながらゆっくりと［4］に吸い込まれていく。寺男は、その消えていく頃合を見計らってまた次の鐘を打つのである。〔オ〕それは非常にゆるやかなリズムをつくり、鳴る鐘の音よりはむしろ余韻そのものを楽しむといった趣がある。

一方、ヨーロッパの事情に通じている友人の一人、戸田邦雄によれば、ヨーロッパの寺の鐘は日本の鐘とは大分様子が違うようである。そういわれれば、僕も何度か映画などで見ているが、寺男はたれさがった綱にぶらさがるようにして鐘を鳴らす。その運動はかなり敏捷で、ときには何本もの綱に飛び移って幾つもの鐘を鳴らしている。それは鳴る鐘の音一つ一つに耳の注意を集めようとするかのようで、そのためにも幾つもの異った音の鐘が必要といった按配である。

ところで、蛙が水に飛び込む音や、蝉の声にかぎらず、自然の物音は総じて［5］である。なかには、「芭蕉野分して盥に雨を聞く夜哉」という俳句の通り、さまざまな音度を含んだ物音もあるにはあるが、しかし芭蕉の耳は激動する台風の響きに奪われているのではなく、実は「盥に」雨をきいている。いうなら動の中に［6］を求めて充足する耳、あるいは［7］より単一にひかれる耳というべきであろうか。しかもその単一への味到はまことに徹底したものがあって、ときには蕪村の俳句、「春の海終日のたりのたり哉」に見るように気の遠くなるような単一を前にする。騒音の中に暮す現代人には一寸縁遠い話のようだが、この単一への味到は、対象に没入して己を無にするという、その［8］の境に発する心情にほかなるまい。蕪村の身も心も、その［8］によって、春の浜辺に打ってはかえす果てしない波の音の中にとけ込んでいって、あとはただ、［X］海だけが一面に広がっているという光景である。思うに日本の耳はそのようにして松籟を愛し、箆の音を楽しんできた。いわばそれは松籟をきいて風と化し、箆をきいて水と化す心である。

（小倉朗『日本の耳』による。一部改変）

注

1　蛙（かわず）…カエルの異名。

2　芭蕉…松尾芭蕉（一六四四～一六九四）。江戸時代前期の俳人。

3　野分…秋の暴風。多く台風をいう。

4　盥…顔や手足を洗うのに使う容器。洗濯用のおけ。この句では盥に雨漏りを受けている意。

5　音度…音の高低の程度。

6　味到…内容を十分に味わい知ること。

7　蕪村…与謝蕪村（一七一六～一七八三）。江戸時代中期の俳人・画家。

8　松籟…松のこずえを吹く風、その音。

9　筧…水を導くために地上にかけ渡す、竹や木で作ったとい。

問一　傍線部①「並大抵」の意味に近い熟語を本文中から選び、答えなさい。

問二　傍線部②「ある独自の感性」の意味として、最も適当なものを選び、符号で答えなさい。

ア　古い日本の音楽とは一線を画する感性

イ　ヨーロッパの近代音楽に通底する感性

ウ　打楽器の響きを好む東洋的な感性

エ　閑寂の緊張をささわける感性

オ　日常的な情景から音楽をきく感性

問三　空欄1～4に入る最も適当な語句を、次の中から選び、符号で答えなさい。

ア　意識と無意識の間　イ　日常知らぬま　ウ　音に対する感性　エ　無限の空間　オ　限りない静寂

問四　次の一文は本文中〔ア〕～〔オ〕のいずれかに入る。最も適当な箇所を選び、符号で答えなさい。

芭蕉の耳はその遠近を実感として捉えた。

問五　波線部「鳴る鐘の音一つ一つに耳の注意を集めようとするかのよう」なヨーロッパの寺の鐘とは違う日本の梵鐘の特徴を述べた箇所を十字以内で抜き出しなさい。

問六　空欄5～8に入る最も適当な語句を、次の中から選び、符号で答えなさい。

ア　無我　イ　単一　ウ　多様　エ　自然　オ　静

問七　空欄「X」に入る最も適当なものを選び、符号で答えなさい。

ア　のたりのたりとした　イ　終日晴れ渡った　ウ　春のまぶしい

エ　騒がしい波のうつ　オ　人々の遊ぶ砂浜と

問八　次のＡＢＣの文章の空欄に入る最も適当な語句を、後のア～オから選び、符号で答えなさい。

Ａ　先日のテレビの報道は自分にとって［　　］内容であった。

Ｂ　かれはいくら熱心に頼んでも［　　］態度であった。

Ｃ　近ごろ、人の言葉に素直に［　　］ようになった。

ア　馬耳東風の　　イ　壁に耳ありの　　ウ　耳を傾けることができる

エ　寝耳に水の　　オ　耳を貸そうとしない

二　次の問いに答えなさい。

問一　①～⑩の傍線部のカタカナに当てはまる漢字を、それぞれのア～オの中から選び、符合で答えなさい。

①　冷害で食リョウが不足している。

②　周囲は禁リョウ区だ。

（ア　糧　　イ　療　　ウ　量　　エ　猟　　オ　陵）

③　一年の期限付きでコ用された。

④　仲間からコ立している。

（ア　誇　　イ　孤　　ウ　弧　　エ　顧　　オ　雇）

⑤　地方の支社にフ任する。

⑥　巨額のフ債を抱える。

（ア　負　　イ　不　　ウ　赴　　エ　符　　オ　普）

⑦　レイ細企業が多い町だ。

⑧　手洗いをレイ行する。

（ア　霊　　イ　励　　ウ　麗　　エ　零　　オ　礼）

⑨　振り子の振プクが大きい。

⑩　若者の心プクを得る。

（ア　伏　　イ　腹　　ウ　服　　エ　複　　オ　幅）

問二　①～⑤の四字熟語の□に当てはまる漢字を、ア～コの中から選び、符合で答えなさい。

①　温□知新　　②　言語□断　　③　山□水明　　④　意□薄弱　　⑤　過□評価

ア　小　　イ　同　　ウ　故　　エ　思　　オ　紫

カ　姿　　キ　志　　ク　少　　ケ　道　　コ　古